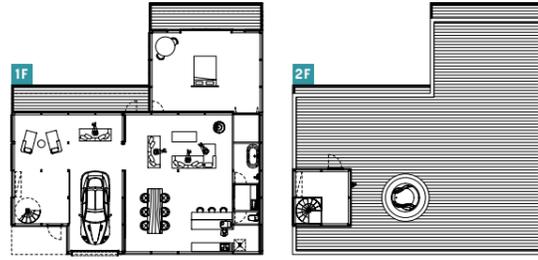


Text/Atsushi TAMADA

FLOOR PLAN

海を眺める“望洋”をテーマにしたオーシャンリゾートヴィラのプランニング。大きく崖に張り出した広い寝室は、高床式建築ならではの設定。気分を変えて屋上のジャグジーバスも生身の存在としての自分を再認識させてくれます。



- 1 崖の斜面で海に張り出すミッドセンチュリーデザインのリゾートヴィラ。建物背面には道路があることが工事の前提条件となります。直線的なデザインは、むしろ人為の矮小さを表現する謙虚な表現です。
- 2 インナーガレージと一体感のあるリビングルーム。愛車のハイレベルな工業デザインが室内のアクセントとして機能し、天井と庇の連続感が開放性を一層強調します。
- 3 外部に見える海と一体になる屋外のインフィニティ型のジャグジーバス。自然と向かい合って、今ここにあるがままを実感する場所。まるで座禅の境地に近い貴重な時間です。



# 自然に“寄り添う”高床式建築のバケレンとしての可能性

自然を“所有”するのではなく、自然に“寄り添う”建築を媒介として、“高度なシェア”というスタンスで、大自然に接する“バケーションレンタル”。その可能性について考えてみました。

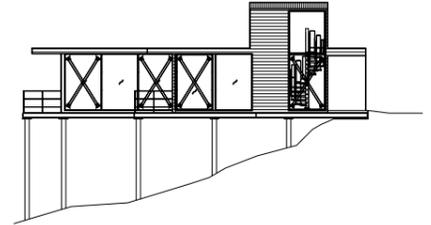
江戸時代に庶民の間で大ブームとなった“お伊勢参り”をはじめとして現代に至るまで、日本人の観光のイメージは、霊験あらたかな神社仏閣や有名な景勝地などを、寸暇(すんか)を惜しんで見てまわるといふ、少し忙しいイメージがあります。しかも団体で行うことが“日本人特有”と言われた時期がありました。一方、“リゾート”という概念は、それとは少し違うイメージかもしれません。自然環境豊かな場所での“長期滞在”や“保養”のように、むしろできるだけ静かに元の自分を回復するというイメージがあるような気がします。

そのような“リゾート”という概念は、明治以降西洋人によってもたらされたものです。箱根、日光、軽井沢などは、もともと景勝地ではありましたが、明治初期に来日したお雇い外国人によって、そのような意味の“リゾート地”として再発見された場所です。ですから必然的にそれらの場所に建つ初期のリゾートの建築物は、西洋建築の様式で作られました。

その後、西洋に対する日本人のコンプレックスと相まって、日本人の“リゾート”という言葉の使い方も変質。本来的なリゾートの趣旨を離れて“西洋的ステータス”を身にまとった、という階級を象徴するイメージが付きまとい、奇妙な変質を続けたのです。1980年代になると、リゾートは高度経済成長の勢いもあって大衆化しました。その頃の“リゾート”という言葉には、バブル期の“上昇志向”のイメージそのものでした。“西洋的”で“リッチ”という表層的なイメージです。しかしバブルの崩壊とともにそのイメージは崩れ落ちていきました。

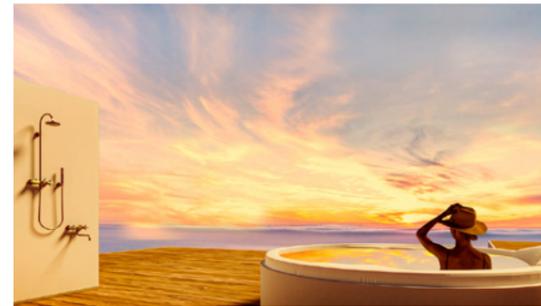
一方で、本来の“リゾート感覚”を日本人に紹介していたのは、むしろ様式的な西洋的意匠性を否定する“モダニズム”の建築家でした。例えば1962年に発表された、吉村順三の『軽井沢の山荘』は、自然との一体感を日本人らしい感受性で表現した独特の穏やかな境地を表現しています。そして、2020年代、従来の“階級の上昇志向”や“所有欲”という赤裸々な欲望を相対化して、純粋に自然と相対するイメージの新しいリゾートの考え方、あるいは本来のリゾート感覚が日本においても一般化してきました。それはいわば“高度なシェア”という考え方です。本当は豊かな森や山や海はだれの所有物でもありません。それを個人の所有とステータスの表現として独占すること自体、いびつな欲望なのかもしれません。という疑問が表出されたのです。しかし現代社会の法体系は、誰が税金を納めるのか？を明確化させるシステムであ

デイトナが提案する新しい建築のカタチ



るため、“所有権の所在”を明らかにさせようとしません。現実的にはその法体系に準拠しながらも、できるだけ大自然をシェアできる施設としてのリゾート建築。大げさに言えば、それは“人類の新しい挑戦”ともいえるスタンスだと思います。

最近、積極的に海外から移入され始めたリゾート建築の新しい利用法“バケーションレンタル(通称バケレン)”は、好意的に解釈すればそのような思想性を根底に持っていると言えます。新しく制定された『民泊新法(住宅宿泊事業法)』によって、年間120日以内であれば、所有する物件を一般に貸し出し可能なのです。一般にとは言っても、素晴らしいビジュアルと落ち着いた“リゾートの本旨”が理解できる人に限られるため、高度なデジタルマーケティングとそのリテラシーの共有が前提になります。



今回は、バケーションレンタルとしての利用を前提とした海岸に寄り添う高床式リゾートハウスを考えてみました。一般の工法では、敷地にコンクリートの塊のような過剰な擁壁を最初に造営して、その上に建築をします。それが20世紀型。費用も時間も多く要し、そして何より人間の都合による“自然破壊”的なイメージが漂います。この建築は、鋼管杭を利用した独自の工法により、自然を所有するのではなく、寄り添うイメージを表現しています。ここを静かに利用することによって、自らの存在を根底的に考え直す時間を持つことができる。感覚が研ぎ澄まされ、人生はより豊かになることでしょ。

What's DAYTONA HOUSE?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽鋼鉄骨のLGSパネル。厚さ3mm～4mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅182cm、縦270cmの長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ「ブレース」が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

LDK inc. 代表 玉田敦士  
デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデューサー会社LDK inc.建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行。

www.daytona-house.com



Photo/Ryota SATO Text/Atsushi TAMADA



A 棟

8住戸がスラリと連結したA棟の外観。これは全国に増殖中の「BLACK HANGAR」と呼ばれるタイプで、何と言っても他の追随を許さない豊かな吹き抜け空間が持ち味。開放的な空間性重視のユーザーにはピッタリのガレージ住居なのです。



B 棟

螺旋階段の部分に縦に貫くガラスウォールを持つB棟。サイズは3×4スパンのリッチな空間となっていますので、住居使用はもちろん、ファミリー層やDINKsのレジャー拠点、オフィスや会社の保養所としても活用可能です。

## 木更津金田ICより2km圏内の好立地に ライフスタイルの拠点となるGLB登場 GLB AQUA-KISARAZU

詳細は  
こちら



江戸時代の昔から交通の要所として栄えた木更津の地。風光明媚でありつつ、文化の中心と至近距離。しかも天然の良港があったりと、様々な利点を併せ持つ場所なのです。東京湾を橋で繋ぐアクアラインと、千葉縦貫道が完成したことで、その位置づけは今、さらにパワーアップし始めました。

モビリティや高速道路網の発達で、“2WAYアクセス”が可能な場所。空いてれば東京圏にも30分、南房総の美しい海にも40分でアクセス可能な好立地なのです。この仕事も遊びも両

方こなせる中間基地ともいえる環境を十分意識して、この度間取りの違う2つのタイプの棟をそろえた「GLB AQUA-KISARAZU」が満を持してオープンします。2棟はそれぞれ、豊かな吹き抜け空間を持つ従来型のA棟と、間口の広い居住性を重視したタイプのB棟。格納する愛車のサイズや、格納するギア類の物量、その他ライフスタイルに応じてセレクトできるので、2つの棟に挟まれた空間には、モーターフリークにはたまらない濃密な空気が充満することでしょう。



B棟でのライフスタイルシーンがよくわかる断面CG。ガレージの間口の余裕が豊富なギア類のディスプレイを可能に。1Fガレージ奥にトイレ、洗面、バスといった水まわりを配置することで、2Fは伸びやかな空間を確保しています。

## LIVING

B棟のリビングルームイメージ。2階には個室、キッチン、トイレ、クローゼットが備わります。リビングだけでなく、更なる個室やクローゼットも備えているため、リッチな平面的豊かさを重視するユーザーにはこちらのタイプがふさわしいのです。



# K・BLOC HARINAKANO

いろんな意味でハイパーな  
高架下ガレージレジデンスの近未来



詳細は  
こちら

## GARAGE 1

1929年式のホットロッドと珠玉のチョップパーをガレージに格納した風景。露出したマットな鉄骨フレームと、そこに格納されるクルマがまるで会話をするように呼応するかのようです。デイトナハウスがこれを“構造デザイン”と呼んでいます。壁面にはキャプテン・アメリカのポスターを。気分はまるでイージーライダーですね。

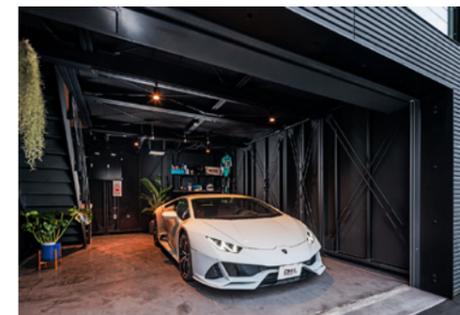


Specialthanks/LUCK MOTORCYCLE www.luck-mc.com

## GARAGE 2

一方、ランボルギーニ・ウラカンエヴォのようなスバルタンスーパーカーが格納されて、違和感なく完全にそれを受け入れてしまう鉄骨フレーム空間。それどころか、ウラカン後部のV10エンジンが格納されたガラス部分からのぞく、X形状の骨組みとも、高度な親和性を実感できました。

Specialthanks/  
LAMBORGHINI OSAKA  
lamborghini-osakakobe.com



従来の高架下のイメージを完全に塗り替える  
戸建てガレージレジデンスが誕生しました。  
喧騒が賑やかな大阪市内の中心部に位置する  
出撃基地に、ふと昔見たSF映画を思い出しました。



大阪ミナミの動脈ともいえる近鉄南大阪線。始発の大阪阿部野橋駅からわずか4駅目の針中野に、近鉄×デイトナハウスのガレージレジデンス企画の第2弾「K・BLOC HARINAKANO」が完成しました。今回は、前回のGLBタイプ(連棟長屋)ではなく、戸建てタイプでの企画です。

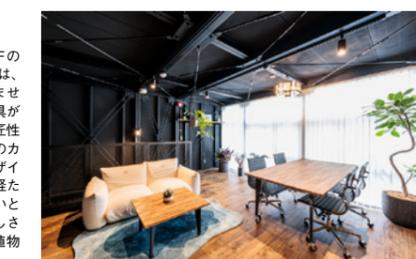


コロナ以降の急激な社会の変化の中で、都市の交通インフラの位置づけも微妙に変化し始めています。必ずしも毎日決まった時間での通勤を必要としない労働形態の企業が増加中。ともすれば、テレワークが多くなり、家に引きこもりがちですが、そんな時こそ能動的に外に出てきた情報をインプットすることが大事なのです。この高架下戸建て住宅は、鉄道の利便性としてのガレージを兼ね備えた、まさに“動く人”向けの賃貸戸建て住宅なのです。

ウェット感満点の大阪の下町風情。今でも賑やかな商店街や、おいしいお好み焼き屋さんのある街、針中野。そのはるか上方を走る近鉄電車の高架下の場所。そこは都市にぽっかり空いたエアポケットのような場所。自然発生的な非合法の店舗が群生した終戦直後の名残りを整理しながらも、いま全く新しいエアポケットの利用法が各電鉄会社で模索されています。近鉄グループの「K・BLOC」シリーズは、その中でも特に画期的な21世紀型の高架下住居企画なのです。

## LIVING

鉄骨の骨格を露出させた2Fのリビングルーム。この空間では、鉄骨の緊張感を上手に緩ませる、傑出したデザインの家具がフィットします。無駄な意匠性を排除した原型的な“モノのカタチ”の追求。構造と家具デザインの真剣勝負。その営為を経た“モノ”だけをチョイスしたいところですね。もちろん端々しさを空間にプラスする観葉植物運も忘れずに。



Specialthanks/ 花繁 hanashige87.theshop.jp

Text/Atsushi TAMADA

# 時代の変わり目にデイトナハウスが考える “21世紀型建設業”のイメージ

21世紀型の建設業を考えると、そもそも近代とは何か？近代社会の成立に建築が果たした役割とは何か？を考えることと同義です。21世紀にはいったい何が終わって、何が始まるのか？そして具体的なデイトナハウスの建築企画は、なぜ21世紀的なチャレンジをするのか？じっくり腰を据えて考えてみました。



タミヤの軍艦プラモデルの挿絵が秀逸だった、小松純茂の愛弟子・伊藤展安による「2061年の東京」

表的です。曲線的なデザインの高層建築が林立する都市空間で、クルマが空を飛び交い、立体交差のリニアモーターの公共交通が行き交うようなイメージでした。日本の建設業はこの絵をいまだに抱き続けていくのかもしれない。

だから、東京のお台場やレインボーブリッジ周辺など表面的には真鍋博のイメージが実現しているかのような風景が再現されています。しかし真鍋博の未来予想図内の高層ビルの中には何が入っているのかはあまり明確な提示がありません。おそらく現在と同じように、企業オフィスと高級レジデンスというイメージだったのだと思います。この当時、現在のようなテレワークの現実化と普及は想定されていませんでした。だから絵の主人公は高層建築と様々な交通機関なのです。もし今後とも都市中心部への価値や情報の集中が継続するのならば、建設業にも、その需要が継続するでしょう。しかし今後私たちは都市中心部の空洞化と分散化を目的にするかもしれません。それは、富士通の本社屋移転のような現象が連鎖する状況です。

21世紀型建設業のイメージとデイトナハウス

右記のような、都市の空洞化と分散化

## 20世紀型建設業とは どのようなものであったか？

21世紀の新しい建設業のイメージを考えていくにあたって、まず初めに、そもそも論としての20世紀型の建設業がどのようなものであったか？を考えてみたいと思います。

明治維新の前後、日本の建設業は大きく二つに大別されました。それは在来の日本人向け建築と西洋人に依頼された建築（在来木造建築のフェイク）を始めたいくつかの「組」が、後世のゼネコンになったと言えるわけです。彼らは比較的新興の勢力でした。伝統的な大工はむしろ西洋人の仕事はしなかったのです。

その後、それらの「組」が重宝されたのは、これも西洋から移入されたばかりの鉄道建設でありました。建設的には駅舎の洋館建築の仕事ですが、むしろ山や川を越えて線路を通す、土木工事が主流となっていたのです。その段階で現在もゼネコンとして継続している様々な「組」が参入。初期ゼネコン「組」たちは、初体験の西洋移入の仕事、持ち前の工夫と努力によってこなしていききました。それは確かに明治の日本人の凄さです。その結果、都市中心部から、ものすこい勢いで放射状に鉄道が敷設。そして、鉄道と駅が土地の相対的な価値差を形成していきます。不動産業も、その序列化された土地の、相対的な価値差を流通させる仕事として、徐々に発達していったのです。

そのようにして、日本社会独特の鉄道×不動産×建築の三位一体構造（しかもその序列は鉄道V不動産V建築というもので、建築は最も従属的ですが）が形成。その固定化された三位一体構造の中で再び建築が重要になるのは、階を重ねて上方向に伸びる建築が可能となったからです。それが鉄筋コンクリート造であり、鉄骨

造です。その新技術によって、地面の土地の価値を2倍3倍と上方向に増幅させていくことが可能になりました。そして人もお金も情報も、どんどん都市中心部に集中するようになったのです。ちなみに日本における鉄筋コンクリート造建築で現存する最古かつ本格的なものは、横浜市の日本大通りに面して建つ「横浜三井物産ビル」と言われています。その竣工は案外早く、1911年。しかしそれらの新技術を駆使したビルディングが本格的に建築されるのは、関東大震災後の1920年代です。

大雑把に言えば、鉄筋コンクリート造が一般化する中で都市の地面を盛り蕎麦のように上方向に増殖させていく技法がビルディングを作る仕事もゼネコンの主要な仕事になっていったのです。そこから先は非木造や公共施設や軍事施設、大手企業の本社屋などがゼネコン、木造を中心とした住宅が地場の工務店という分野。というより、建築業の二極分解がより明確になり、そのプロセスの中で、政府の後押しも受けながら、ゼネコンは巨大化していったのです。

20世紀型建設業のイメージ

日本が土建国家公共事業による土木、建築事業で雇用を確保し、経済を回す、それを原動力とする国家。になった原因はいろいろあると思います。しかし何となくも特筆すべきは1923年の関東大震災と1945年の東京大空襲という二つの大いなる破壊で灰燼に帰したのだと思います。これは他の先進国にはない特徴的な要因です。東京は一度ならず二度でもゼロクリアされた都市だということでも。つまり、土建建た都市にたざるを得なかった側面もあるということです。焼け野原と瓦礫の山の都市に、再び必要な建築をコツコツと作っていく国家。あるいは天災の対策として恒常的に土木工事を行なっていく国家。経済をそうして土建中心に回す癖がついてしま

たので。だからまだ十分使えるデザインのいい建物を闇雲に解体してしまったり、再開発と称して新しい巨大ビルを次々に作り続けています。しかしそろそろ、供給過多という話が飛び交っているのです。それでも、土建国家ニッポンはさらにスクラップ&ビルドを続けていかざるを得ないです。誰も大地震が来て欲しいとストリートに願望する人はもちろんいないと思います。しかし東京や大阪という大都市の、潜在的な意識、あるいは、深層心理としては、「次のスクラップがなければビルドする機会がない」ということを薄々感じながら日々を送っているのです。

デジタルネットワークの進展とコロナ加速 都市の意味の変容と盛り蕎麦建築の不毛



真鍋博の未来予想図



真鍋博の未来予想図



2001年の日本

201

それは、ゼネコン系（近代系）の領域でした。しかし「LGS工法」は在来木造を取り扱う木造系の職人（大工さん）が、施工できるように規格しています。金太郎船のように画一的なアパートという商品領域に、ライフスタイルを全開させる鉄骨露出のガレージや居室は、デイトナハウスが開発している鉄骨システム「LGS工法」の骨組みを露出させています。ビルドする機会がない」ということを薄々感じながら日々を送っているのです。

デイトナハウスが提案する  
建設の新しいカタチ

デイトナハウスが、21世紀型建設業のイメージを体現した時代の変化を深く考察して提案している建築の、新しいカタチの事例をご紹介します。

まず、その典型的な事例は、遊動性を中心テーマにした賃貸ガレージアパート「GLB」です。これは単にクルマを置く場が併設された賃貸物件、という意味にとどまらず、より積極的に時代を生き抜くためのコンセプトに裏打ちされています。GLBのガレージや居室は、デイトナハウスが開発している鉄骨システム「LGS工法」の骨組みを露出させています。ビルドする機会がない」ということを薄々感じながら日々を送っているのです。

GLBは、都市周辺部にこそならず、いろんな場所に増殖を始めて、時代の変化に即応したポテンシャルを表現しています。例えば、リゾート系GLBと呼ばれるものは、都心から1〜1.5時間圏内のリゾート地に建築したGLBです。これは明らかに主要な居住を前提にしない、二拠点生活に内包する意味です。遊動性を住居内に構築する意味が、更にパワーアップして発揮された新形式のGLB。従来の「ステイタス」を振りかざすための、別荘という領域を軽々と飛び越えた、21世紀型の住居形式と言えます。

また、高床式建築「TYPE-F」も、21世紀型の新しいコンセプトを体現した、新しい建築のカタチです。その大きな特長は擁壁や基礎にコンクリートを使用せず、自然に寄り添う建築であるということ。従来、リゾート開発など、自然環境豊かな土地で建築する場合は、そもそも大規模な造成が行われ、その斜面地はコンクリートの擁壁で区画されていました。

それ自体、人間の勝手な都合の産物、大いなる自然破壊でありました。TYPE-Fは、斜面でも土地の形質を変更することなく、鋼管杭を打って、フワリと浮かび上がりながら自然に寄り添う建築形式を実現しています。森の中でも極力樹木を伐採せずに、建築することが可能なです。TYPE-Fは、遊動性や都市からの脱出、リモートワークの普及の要因など、社会の変化の状況を含わせて考えるとき、なおさら時代即応性のある、新しいカタチであることが認識されると思っています。

店舗建築仕様の「TYPE-S」は、わざわざ細いスチールサッシで大きなガラス面を構成して、リーズナブルなコストで透明感ある店舗建築を実現する新手法です。これによって、派手で大きな看板を設置した店舗建築にせず、店舗の内側の陳列が、外部にしみ出すような存在感の21世紀型店舗建築を実現しています。店舗は今後、商品陳列の量を競う領域から、インターネット販売を併称した、省スペース&高コンセプトな形式へと変貌を遂げていくでしょう。一見アーリーモダンでレトロな印象もある、人肌、鉄骨建築ですが、時代の変化を反映した、新しいカタチと位置付けられるのです。

このように、デイトナハウス建築は、遊動性や都市の分散、モーターライフの優位性などの21世紀的な変化を、従来とは全く別のアプローチで商品に結実させています。そして着実に、21世紀型建設業への構築を始めているのです。

TYPE-S

TYPE-F